

---

---

# 日本子ども社会学会 学会ニュース

第30号

日本子ども社会学会 事務局・広報委員会  
〒152-0004 東京都目黒区鷹番三丁目6番1号 内外出版株式会社  
Fax : 03-3712-3130 E-mail : jscs@naigai-group.co.jp

## 目次

会長就任にあたって	1	テーマセッション報告	3
会長任期を終えて	2	各委員会から	5
第23回大会開催校から	2	平成27・28年度役員委員一覧	7
第22回大会報告	2	会員異動	9

## 会長就任にあたって

永井 聖二（東京成徳大学）

この度、本学会の会長をお引き受けすることになりました。微力を尽くす所存ですのでどうかよろしく  
お願い申し上げます。

日本子ども社会学会は、「子ども社会」を対象とする多様な研究分野からの学際的な研究をすすめること  
を、その第一の使命としています。創立から20年が経過し、20周年記念事業が進められたことは記憶に  
新しいところですが、子どもや子ども社会についての学際的、総合的な研究への期待は、今日ますます大  
きくなっているといつてよいでしょう。学際的な研究交流の場としてのこの学会の特質を大切に、それ  
をさらに充実させていくことをめざしたいと考えています。

大会や紀要のあり方についても引き続き検討をすすめ、研究交流の活性化をめざすことも、もちろん重  
要な課題です。また、運営面では、過去の伝統を生かしつつも、中堅若手を含む多くの会員が学会運営に  
かかわり、学会のあり方について多様な議論がすすむように、理事の任期や多選の制限などについても検  
討していくことが必要な時期が来ているように思います。20周年が過ぎ、会員数も登録者700名にも達し  
たこの学会が、次の時代を切り開くことができますよう、ご理解とご協力をお願いします。

---

---

## 会長任期を終えて

武内 清 (敬愛大学)

住田会長の後を受け、平成23年度から4年間、会長の職を務めさせていただきました。

この間、事務局長の永井先生はじめ、事務局、編集委員会や各種委員会の長及び委員の方に大変ご協力いただいたことを心より御礼申し上げます。

この間の大会開催校(國學院大学、敬愛大学、愛知教育大学)及びその準備委員会の皆様の御苦勞にも、心より御礼申し上げます。

この間、会員数も着実に増え、大会の発表数も増え、学会創立20周年の記念行事(記念大会の開催、学会賞の創設、子ども問題事典の刊行等)も成功裏に終わり、学会も次のステージに進んだように思います。

今後は、永井会長、山田事務局長、新しい各種委員会のもとで、子ども社会学会の学際性と総合性、そして会員の親密なコミュニケーションが一層発展していくことを願っています。

## 第23回大会開催校から

第23回大会実行委員長：西本裕輝(琉球大学)

第23回大会は2016年6月4日(土)・5日(日)の2日間、琉球大学(千原キャンパス・共通教育棟)において開催されます。

大学周辺には宿泊施設はほとんどありません。よってモノレール沿線のホテルをお勧めします。終点首里駅から大学まではタクシーで約20分(1,500円程度)です。またキャンパス内には駐車スペースが豊富にあるため、レンタカーの利用もお勧めいたします。那覇空港から大学までは車で50分程度です。申し訳ありませんが、大会校からホテルや飛行機のご案内はいたしません。ただし各旅行社から安いホテルパック等(レンタカー付含む)が豊富に準備されておりますので、各自で手配していただきますようお願いいたします。

発表申込期間は、2月22日(月)～3月25日(金)を予定しています。また、発表要旨集録の原稿提出締切を5月6日(金)と予定しています。さらに大会2日目午後にはラウンドテーブルを設定いたしますが、その申込締切を3月11日(金)と予定しています。詳しくは大会案内をご覧ください。

多くの方々のご参加、心よりお待ちしております。

## 第22回大会報告

第22回大会実行委員長：片山悠樹(愛知教育大学)

第22回大会は、2015年6月27日(土)・28日(日)の2日間の日程で、愛知教育大学を会場として開催されました。

大会期間中は天候にも恵まれ、すべての日程をなんとか終わることができました。会場としては少しばかりアクセスが不便な場所ではありましたが、192名の皆さまが(一般会員146名、学生会員13名、臨時会員33名)全国より愛知教育大学に来てくださったことに、心より感謝申し上げます。参加者数は例年より

---

も若干多いとの報告を受け、大会実行委員としてひとまず役目は果たせたのではないかと、勝手ながら思っております。何よりも、参加者の方々の熱のこもった報告や討論を感じることができ、実行委員として大変うれしく思っております。

大会準備に際して、学会事務局の方々、とくに加藤理先生と谷田川ルミ先生にはいろいろとご面倒をおかけしました。実行委員の人数が少ないこともあり、報告エントリーの受付業務を佐野秀行先生にご協力いただきました。前回大会校の武内清先生には、大会準備の細々したことまで丁寧に教えていただき、お世話になりました。この場を借りて、お礼申し上げます

参加者の皆さまには、大会期間中、とくに受付の不手際でご迷惑やご不便をおかけしました。学生たちは懸命に大会運営を手伝ってくれましたが、実行委員の私が初めての大会運営であったため、うまくいかない部分がありました。至らぬ点が多々あったと思いますが、ご容赦ください。

最後に、大会開催にご協力いただいたすべての方々には心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございました。

## テーマセッション報告

### 【テーマセッション1：子ども社会研究の学際性の可能性に迫る—多様性と専門性の融合可能性—】

本テーマセッションは、昨年度の第21回大会でのテーマセッション「子ども社会研究の科学的基盤の探求—歴代理事が探求した子ども社会学研究—」の成果を受けて構想された、いわば昨年度のテーマセッションの姉妹企画といえる内容であった。昨年度のテーマセッションでは、日本子ども社会学会創立20周年を迎えて、学会草創期の「熱気」を若手・中堅会員とともに振り返りながら、科学研究としてのも子ども社会研究が今後取り組むべき具体的な課題や方向性について話し合いが行われた。こうした昨年度の成果を引き受け、今年度のテーマセッションは、本学会の大きな特色のひとつといえる「子ども社会研究の学際性の可能性」について、本学会の元理事・元会長からの話題提供のもと議論を行うこととなった。

ひとりめの話題提供者である原田彰先生（広島大学名誉教授・本学会元会長）からは、まずご自身の教育研究がその始まりから学際的志向を持ちつつ進めて行かざるを得ない環境にあったことが紹介された。具体的には、ご自身が担当を務める大学での人権教育が教員間のイデオロギーの違いなどに直面しつつ他教員と協力しながら問題に取り組まなければならない状況にあったこと、そしてそれらの経験が大学における学際的研究（学際的教育）の必要性和重要性を強く思い起こさせるに至ったことが示された。続いて、本学会の発足当時に事務局長を務められた経験から、様々な分野から多くの研究者たちが学際的な子ども社会研究の実現を目指して新しい学会の設立に集まった当時の気運が改めて語られた。しかしながらその一方、本学会でのこれまでの様々な取り組みを通じて、子ども社会研究を学際的に進めていくことの困難さについても指摘が行われた。具体的には、多数の分野の研究者が集まって子どもの研究に取り組むとき、そこには複数のディシプリンの単純な寄せ集め（「ごたまぜの学際性」）となる危うさがあり、様々な専門の研究者たちがひとつのテーマについて成果をまとめあげることがそれほど簡単な作業ではないことが語られた。それよりもまずは、研究者各人が本学会で様々なジャンルの研究者と出会い、またその出会いから自らの専門を超えた多様な子ども研究の成果を取り込み、自分の研究テーマを「学際的に」捉えて発展させていくことの大切さについて言及がなされた。

続いてふたりめの話題提供者である川勝泰介先生（京都女子大学教授・本学会理事）からは、児童文化研究の立場より子ども社会研究の学際性について議論が提示された。まずご自身の研究の紹介のなかで、従来までの児童文化研究に対する批判点（「児童文化財中心」「個別的領域論」「規範的児童文化」）が整理され、子どもの生活と文化の関わりが実際に生じたところにある「児童文化」の探求に自らの児童文化研究

---

の関心があることが示された。しかしながら、日本においては現状「児童文化学会」という名称の学会はなく、「児童文学学会」や「絵本学会」「子ども文化学会」という名の学会が存在し、それらが日本の児童文化研究のフィールドとなっていることが指摘された。したがって、子ども社会研究の学際性という観点で言えば、これらの学会へ（あるいは「子ども環境学会」や「子ども学会」などにも）連携を呼びかける必要があるのではないかという提案が行われた（研究の学際的な広がりとは、ひとつの学会のなかでの学際性と、学会の枠を越えた他学会との交流のなかでの学際性にあるというご指摘であった）。続いて、本学会が「子どもの社会」ならびに「子どもという存在」に様々な分野からアプローチする学会であり、個々の研究者たちが大会のそれぞれの分科会で、いわば「他流試合」を経験することができる点に重要な特徴があるとの考えが示された。

おふたりの先生の話題提供の後、次いでフロアにご参集いただいた会員の方々を交えての意見交換が行われた。はじめに、話題提供での児童文化研究の議論の延長で、「児童文化」と「子ども文化」の違いが確認された。児童文化研究を専門とされるフロアの先生方からは、これら文化と子どもの関係を捉える複数の枠組みがどのような経緯で誕生し、またそれらが子どもの何に接近しようとしているのかについて説明がなされた。続いて、子どもと「発達」の問題に対して、子ども社会研究が新たにに取り組むことのできる課題について議論が進められた。子どもたちの実際の生活のなかには、「発達」という見方だけでは取りこぼされるものが多くあり、またそれら発達「概念」では捉えられない子どもの生活世界や文化については近年多くの研究者たちによって注目されていることが示された。それらの議論の後、いま現在子ども社会研究が取り組むべき課題は何なのかを考える議論へと移行していった。そのなかでフロアからは、子どもを取り巻く社会についてある具体的な問題対象や課題が設定されて初めて、学際性の意味や価値が発揮されるとの理解が示されることとなった。

最後に、本学会研究交流委員であるファシリテーターのふたり（田中理絵・山口大学、高橋靖幸・立正大学）より、今回のテーマセッションを通じての感想が述べられた。それらの感想で示されたのは、子ども社会に関わる学際的研究を進めるために多様な研究分野をどのようにあるいは誰が選別して融合していくことができるのか、また学際的な研究となり得る子ども社会研究の今日的なテーマをどのように設定していくことができるのかという課題であった。これらの問題は、本学会のこれからの10年20年の発展を考えるうえで重要な課題となるように思われる。

（立正大学・高橋靖幸）

## 【テーマセッション2：男子問題の時代か？—子どもとジェンダーをめぐる状況と課題—】

従来の子どもとジェンダーをめぐる議論は、女子に実質的な発達・教育機会の平等を保障することを中心になされてきたが、近年では、学業や社会適応などの点で問題を抱えているのはむしろ男子であるとの言説が聞かれるようになった。しかし、それらの言説は、必ずしも学術的な知見に裏打ちされたものではなく、男子問題への対応策に関する議論も十分になされているとはいいがたい。また、男子への注目が女子の抱える問題を不可視化させる危険性もある。これらを背景として、本セッションでは、「学力」「暴力」「性教育」の各視点から男子をめぐる問題の提起を行い、指定討論者によるジェンダー平等教育の視点からのコメントもふまえて、子どもとジェンダーをめぐる諸問題の現状を確認し、今後の学術的・実践的課題について議論した。

知念渉氏（大阪大学）からは、日本では本格的な実証研究がほとんど行われていない学力の性差について、「大阪学力調査2013」（研究代表：志水宏吉）のデータに基づいて報告がなされた。そこからは、国語に関しては小中学生ともに男子よりも女子で得点が高く、その差は部分的には家庭での読書環境の違いから説明できること、男子の方が学力のばらつきが大きく、低学力層は塾に通っていない男子に多い傾向が



---

あること、学力の高い層で、男子は勉強を競い合い女子は勉強を教え合うといった性差傾向が見られることなどが示された。そのうえで、大学進学において依然として男子優勢である以上、男子の学業不振をことさら強調すべきではないが、男子に多い低学力層の支援や男子の協調性の育成は今後取り組むべき課題になりうるとの指摘がなされた。

山口季音氏(京都ノートルダム女子大学非常勤)からは、男子集団内で暴力文化が再生産される過程の考察が報告された。男子集団での暴力被害経験をもつ成人の回顧インタビューからは、彼らが、被害者でありながら集団の規範に照らして自らが暴力を受けることを納得したり、そうした被害に耐えることで「男らしさ」を証明したりすることを通して、暴力文化の再生産を担ってきた側面が示された。また、児童養護施設での観察調査からは、男子が相手よりも優位に立つ手段として暴力を用いている様子や、年少の男子が年長の男子をモデルとして暴力を学習している様子が示された。そして、男子の暴力問題への対応策を考えるにあたりこうした男子特有の文化を考慮する必要性が指摘された。

池谷壽夫氏(了徳寺大学)からは、性に関わる近年の中高生男子の様子が報告され、自らが携わった調査と日本性教育協会の調査に基づき、男子は女子に比べて性に関して無知で、身近な相談相手がなく一人で悩む傾向が強いこと、これまで女子で顕著だった性に対する無関心や否定的なイメージが男子でも顕著になり、活発化する女子と関係を取り結ぶことを忌避する傾向などが示された。これらをふまえ、性教育においては、男女ともに自他の性的な身体との受容的な付き合いを学び合いながら、男子特有の性の問題にも取り組むことや、男女共修の機会とともに一時的な別習の場を意識的に設け、男子が悩みを出し合い多様な男性性を学び合える保護空間が必要であるとの提言がなされた。

指定討論者の内海崎貴子氏(川村学園女子大学)からは、現職教職員対象の調査と大学生向けのアクティブラーニングの結果から、保育現場においては女兒の暴力に対する不寛容と男児の暴力に対する寛容が表裏一体となっている点や、女子学生においても男性の身体理解に対する無知や無自覚が目立つことなどが紹介され、男子問題と女子問題を切り離して考えることはできず、男子問題研究と女子問題研究はそれぞれの成果の相互交流を図ることによって、互いに新たな知見や視点を提供しあえるとの視点が示された。その後、フロアとの間でも活発な質疑応答や意見交換がなされ、中身の濃い充実したセッションとなった。

(関西大学・多賀太)

## 各委員会から

### 紀要編集委員会から

紀要編集委員会委員長を拝命いたしました加藤理(文教大学)でございます。紀要の充実に努める所存でございますので、よろしくお願い申し上げます。

紀要編集委員会では、現在『子ども社会研究』22号の編集作業を進めております。投稿論文は19本でした。投稿本数は例年よりやや少なめだったのではないのでしょうか。現在は慎重に査読作業を進めております。

投稿論文の査読作業に先立ちまして、編集委員会では今後の紀要の編集方針について議論いたしました。子ども社会学会は多様な領域の研究者が集う学際的な学会であることは誰もが認めるところです。委員会では、学際的な子ども研究をより一層活性化させるための取り組みを紀要の中で行えないか、ということを中心に議論を進めました。その結果、①毎号、学際的な研究テーマで特集を組むことを基本とする、②書評は単なる書評にとどまらず「書評論文」の掲載を目指す、③研究情報も研究上の最新の論点などを整理しながら、論文形式のもの掲載を目指す、④研究交流委員会が企画するテーマセッションと連動した企画を模索する、⑤特集テーマに発展させたいテーマで大会時の発表部会を設けることを提案する、以

---

上のような案が出されました。

22号では「子どもらしさ」の特集を組みます。「子どもらしさ」というテーマは、学会発足の契機となった第45回日本教育社会学会大会でのラウンドテーブルで故藤本浩之輔先生や深谷昌志先生、森楸先生、住田正樹先生らが議論なさったことに通じるテーマであり、20周年を記念して武内清先生がコーディネーターとなって敬愛大学で開かれたシンポジウム「子どもの昔と今—子ども研究の饗宴」の内容にも通じるテーマではないかと思えます。20周年を終えた今、あらためてこのテーマを学際的に追求することは意味があるものと考えます。

22号の「子どもらしさ」という特集は、23号でも継続したいと考えております。これまでは一般の投稿論文のみを受け付けておりましたが、次次号の23号からは特集テーマをあらかじめ告知し、特集でも広く会員の皆様からの投稿を受け付けたいと考えております。

また、22号では人類学や子どもの人権に関する本などを取り上げながら書評論文として読み応えのあるものをご執筆いただく予定でおります。研究情報も、論点を整理しながら論文形式のものをご執筆いただくことを予定しております。

22号ではいろいろと初めての試みを行いますので書評や研究情報、特集の執筆者は趣旨を共有している紀要委員が中心になって担当いたしますが、23号からは会員の皆様に依頼することが多くなることと思えます。

学会の研究活動が活性化し、会員の皆様の研究の推進と発展に寄与できるよう取り組んで参りたいと考えておりますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

(紀要編集委員会委員長・加藤理)

### 将来構想委員会から

今期の将来構想委員会は、いつもよりも多くの委員で構成をしております。多くの分野、広い年齢幅を考慮し、とりわけ、より若い会員の方々にも、学会の将来について、ご意見を頂ける場にしたいと考えました。さしあたっては、永井会長からも、また、前期の岡崎委員長からも申し送りとして付託されている学会理事の多選のルールについて検討し、理事会で中間報告をした次第です。他にも、学会の活性化に向けて、いくつかの課題に取り組みたいと考えていますので、みなさまのご協力を、どうぞよろしくお願いいたします。

(将来構想委員会委員長・細辻恵子)

### メディア活用委員会から

日本子ども社会学会ホームページ(URL:<http://www.js-cs.jp>)では、本学会の活動内容に関する会員の皆様への情報提供に努めております。2015年6月以降、更新された情報は、以下の通りです。

- (1) 2016年度学会大会の案内(開催地・開催時期の情報)
- (2) 共同研究事業委員会から(平成28年度)「奨励研究基金・公募」のお知らせ
- (3) 研究奨励金公募のお知らせ
- (4) その他: 講演会等のお知らせ

現在、ホームページ内容の更新を、少しずつ行っているところです。会員の皆様には、是非当学会ホームページを訪問していただき、ご意見をお寄せ下さい。

(メディア活用委員会委員長・藤田由美子)

---

## 平成27・28年度役員委員一覧

### ●当選理事（◎会長）

◎永井聖二（東京成徳大学）  
青井倫子（愛媛大学）  
安東由則（武庫川女子大学）  
太田佳光（愛媛大学）  
加藤理（文教大学）  
加野芳正（香川大学）  
熊澤幸子（東京成徳大学）  
白松賢（愛媛大学）  
多賀太（関西大学）  
武内清（敬愛大学）  
中坪史典（広島大学）  
深谷和子（東京学芸大学（名））  
藤田由美子（北海道教育大学）  
南本長穂（関西学院大学）  
山田浩之（広島大学）

### ●推薦理事

飯田浩之（筑波大学）  
鶴野祐介（立命館大学）  
小針誠（同志社女子大学）  
田中理絵（山口大学）  
細辻恵子（甲南女子大学）  
谷田川ルミ（芝浦工業大学）  
山縣文治（関西大学）

### ●会計監査

浜島幸司（同志社大学）  
山瀬範子（國學院大学）

### ●評議員

相原次男（宇部フロンティア大学）  
麻生武（奈良女子大学）  
上杉孝實（京都大学（名））  
岡崎友典（放送大学）  
川勝泰介（京都女子大学）  
坂入明（元東京家政大学）  
坂元一光（九州大学）  
新富康央（國學院大学）

住田正樹（放送大学（名）・九州大学（名））  
原田彰（広島大学（名））  
松澤員子（学校法人ルーテル学院）  
望月重信（明治学院大学（名））  
持田良和（龍谷大学）  
山田富秋（松山大学）

### ◆学会賞選考委員会（◎委員長 ○副委員長）

◎武内清（敬愛大学）  
新富康央（國學院大学）  
深谷和子（東京学芸大学（名））  
望月重信（明治学院大学（名））

### ◆紀要編集委員会

◎加藤理（文教大学）  
麻生武（奈良女子大学）  
安東由則（武庫川女子大学）  
池田曜子（流通科学大学）  
石黒万里子（東京成徳大学）  
磯崎三喜年（国際基督教大学）  
鶴野祐介（立命館大学）  
尾川満宏（愛媛大学）  
片山悠樹（愛知教育大学）  
神長美津子（國學院大学）  
小針誠（同志社女子大学）  
高橋靖幸（立正大学）  
田中理絵（山口大学）  
坪井瞳（浦和大学）  
浜島幸司（同志社大学）  
針塚瑞樹（別府大学）  
細辻恵子（甲南女子大学）  
目黒強（神戸大学）  
元森絵里子（明治学院大学）  
谷田川ルミ（芝浦工業大学）  
山縣文治（関西大学）  
山田富秋（松山大学）  
湯地宏樹（鳴門教育大学）  
吉岡一志（山口県立大学）

---

---

◆共同研究事業委員会

- ◎中坪史典 (広島大学)
- 嘉納英明 (名桜大学)
- 香曾我部琢 (宮城教育大学)
- 須田康之 (兵庫教育大学)
- 藤田由美子 (北海道教育大学)

◆研究刊行委員会

- ◎南本長穂 (関西学院大学)
- 麻生武 (奈良女子大学)
- 石井久雄 (明治学院大学)
- 大倉健太郎 (大阪女子短期大学)
- 須田康之 (兵庫教育大学)
- 南出和余 (桃山学院大学)

◆研究交流委員会

- ◎多賀太 (関西大学)
- 東野充成 (九州工業大学)
- 磯崎三喜年 (国際基督教大学)
- 内田康弘 (名古屋大学大学院)
- 渋谷真樹 (奈良教育大学)
- 坪井瞳 (浦和大学)
- 目黒強 (神戸大学)
- 元森絵里子 (明治学院大学)
- 山口季音 (至誠館大学)

◆広報委員会

- ◎山田浩之 (広島大学)
- 尾川満宏 (愛媛大学)
- 坪井瞳 (浦和大学)
- 西本佳代 (香川大学)

◆将来構想委員会

- ◎細辻恵子 (甲南女子大学)
- 富江英俊 (関西学院大学)
- 岡崎友典 (放送大学)
- 片山悠樹 (愛知教育大学)
- 川勝泰介 (京都女子大学)
- 小針誠 (同志社女子大学)
- 夏秋英房 (國學院大学)
- 藤田由美子 (北海道教育大学)

- 松田恵示 (東京学芸大学)
- 山田富秋 (松山大学)

◆メディア活用委員会

- ◎藤田由美子 (北海道教育大学)
- 久保田真功 (富山大学)
- 佐野秀行 (大阪人間科学大学)
- 中田周作 (中国学園大学)

◆倫理委員会

- ◎青井倫子 (愛媛大学)
- 久保田真功 (富山大学)
- 白松賢 (愛媛大学)
- 鶴田真紀 (貞静学園短期大学)
- 長谷川祐介 (大分大学)
- 湯地宏樹 (鳴門教育大学)

◆事務局

- ◎山田浩之 (広島大学)
- 石黒万里子 (東京成徳大学)
- 伊勢本大 (広島大学大学院)
- 尾川満宏 (愛媛大学)
- 西本佳代 (香川大学)
- 藤村晃成 (広島大学大学院)

(五十音順、2015年12月31日現在)